

シンポジウム

ザ・シンポジウムみなと in 小樽 「開基 150 周年・開港 120 周年 ～船客万来・小樽港が目指す機能的な港湾～」

ザ・シンポジウムみなと実行委員会

今年で開港 120 周年を迎えた小樽港の歴史や現状、将来像などを考える「ザ・シンポジウムみなと in 小樽」(北海道経済連合会などで作る実行委員会主催)が 11 月 27 日に小樽市色内の小樽市民センターマリホールで開かれた。約 400 人の市民が参加。小樽市総合博物館の石川直章館長が基調講演で小樽港の歩みと日本の近代化の中で果たした役割を紹介し、パネルディスカッションでは地元の経済人らが港の話題や今後への期待を語り合った。

基調講演

日本の「近代化」運んだ港

石川 直章 氏

小樽を語る時に「港」というキーワードを外して語ることはできません。作家の小林多喜二は小樽のことをこう書きました。「広大な北海道の奥地から集まってきた物産が、ここからまた内地に出ていく。謂わば北海道の『心臓』みたいな都会である」と。小樽港が果たしてきた役割を端的に表した言葉です。一方で明治時代には北海道の「近代化」を担った移民の多くが小樽港に上陸し、ここから北海道生活の第一歩を踏み出していました。

1869 年(明治 2 年)に小樽港に「海関所」が開設され、以後は蝦夷地に商船が自由航行できるようになって、小樽にもたくさんの船がやっ

てきます。明治以降、小樽港が担った大きな役割の一つが石炭の搬出です。空知の幌内炭鉱から小樽や室蘭へ鉄道で運ばれ、そこから船で本州へ運ばれた石炭が工業の発展を支え、日本の「近代化」を進める原動力となったのです。

一方、明治 30 年代に小樽港から国内向けに



石川 直章氏(いしかわなおあき)
小樽市総合博物館長
専門は考古学・文化史学。2013 年には日本博物館協会活動奨励賞を受賞した。

出荷された品を見ると、小豆などの農産物が多い。北海道各地の産品が鉄道で小樽に集められ、ここから出て行きました。本州からは米などが小樽港に入り、道内各地に運ばれました。米が多く入ってきたので小樽では精米や酒造が盛んになり、小豆を使った和菓子の製菓業も発展した。今でも小樽の街中にお餅屋さんが多いのは、物流の玄関口となる港があったからです。

物流が盛んになると品物を貯蔵する倉庫業も発展し、銀行も増えます。港に近い小樽の市街地には半径 500m 内に明治から昭和初期にかけて建てられた銀行の建物が多く残っている。これだけ集積しているのは全国でも小樽だけです。

さらにもう一つ、小樽港は「港の近代化」を全国に運んだ港でもあります。国内初の外洋性防波堤である小樽港の北防波堤を廣井勇が

1908 年（明治 41 年）に完成させて以後、近代的な外洋防波堤が全道、全国に造られました。廣井先生が育てた弟子たちは国内各地や台湾、パナマ運河でも築港に携わった。100 年もつコンクリート構造物を造っただけでもすごいのに、廣井先生はそれで終わりとせず、100 年後にも強度を検証するテストピースを残された。100 年以上にわたるコンクリートの劣化データを持っているのは、世界でも小樽だけです。

小樽港は日本の近代化に非常に重要なファクター（要因）だったと思います。港があったからこそ、小樽から日本を、そして世界を見ることができるようになった。小樽は「人」と「物」の十字路であり、多様な文化が残っています。明治以降の近代化の中で、日本人が必死に生きた時代の、かけがいのない生き証人でもあり、それを後世に伝えていく必要があります。

パネルディスカッション

「未来の小樽港」～多様な機能に効率的に対応する港湾を目指して！

新幹線と船つなぐ試みも

迫

日本海時代への先手打て

田村

石狩湾新港と連携を強化

大田

乗船客の待機スペースを

富田

市民も親しめる「巷」に

小笠原

人と物 行き交う小樽に

李

李 小樽港の 100 年を超す歴史を踏まえ、これからどう発展させていけばいいか、現状や課題を考えていきたいと思っています。

迫 小樽港は日本海に面し、対岸諸国との交易に有利な場所にある天然の良港です。臨港地区には多くの商業施設や観光施設もあり、国内の輸送拠点として重要な役割を担っています。クルーズ船も入港し、「船客万来」で多様な船舶の利用があります。一方で近年は港の水深不足で積載量を減らす大型船が出ていること、コンテナ置き場や観光船の発着場所が分散していて効率的でないことなどが課題になっています。

大田 私の会社は海から荷物を揚げて配送まで港湾に関わる事業をしています。小樽港でも外航コンテナ船の荷役などをしていますが、北海道全体の課題として輸入貨物に比べ輸出貨物量が極端に少ない。極東ロシアとの貿易は小樽港が全道の 8 割を占めますが、中古車の輸出や水産物の輸入が減り、影響を受けています。小樽港で扱う一般貨物は最近 20 年で半減しており、荷役に関わる企業の経営環境は厳しい状況です。

富田 私の会社はクルーズ船につぼん丸を運航し、小樽港では「飛んでクルーズ北海道」と

いう空路と結んだ企画を行っています。既存の交通機関では行きにくい利尻・礼文と知床を3泊4日でめぐるルートで人気が高く、これまでに約2万人が乗船しました。船会社から見た小樽港の最大の魅力は新千歳空港からのアクセスの良さ。小樽駅から港へ向かう景観も魅力です。

小笠原 小樽商工会議所は小樽港のあり方を考えるプロジェクトで第3号ふ頭基部と周辺地域を観光資源として活用する方策などを考えてきました。ふ頭周辺の魅力を市民に知ってもらうため、コンテナを利用したカフェや雑貨店、バルも実施しました。小樽港は物流港であると同時にマリナなどもあり、観光船も発着しています。近くに運河という一大観光スポットもあり、人の交流や観光の拠点として活用していく必要があると考えています。

田村 多様な機能を盛り込もうとすると、か



つては「ハコ物」の施設をつくることでしたが、今は違う。施設づくりも大事ですが、ハード・プラス・ソフトというか、課題を解決するアイデアと行動が求められていると思います。

李 小樽港に求められていることは何でしょうか。目指すべき姿はどのようなものでしょうか？

大田 小樽は道内屈指の観光地ですが、観光客の安全を確保するために観光と物流のすみ分けも必要です。物流面では同じ日本海側の玄関口として石狩湾新港と連携を強化し、共存共栄を図ることも大事です。

富田 クルーズ船を運航する立場では港の近くに乗船客の待機スペースがほしい。特に雨天時は困っています。1クルーズ400人前後ですので、大型ターミナルでなくていい。乗船前の人向けに小樽を知るツアーを企画してもいいのではないのでしょうか。

小笠原 小樽港の歴史を通史的に俯瞰できる公的施設もほしいですね。そこが市民と観光客の交流の場になればいい。

迫 市内の中心部に近い第3号ふ頭をクルーズ船の拠点にして、より機能的な港湾に再編整備していくことは考えたい。ターミナル機能の整備も進めたいと思っています。もちろん、物流も港の柱ですから、対岸貿易の振興もしっかりやっていきたい。

田村 おそらく100年後には日本海中心の社



会が生まれます。そのための先手をしっかり打つことが大事だと思います。最近の若い人たちには自宅、職場以外の3つ目の場所「サードプレイス」が求められている。そういう場所を港につくれれば、市民と世界中の旅行客との交流の場になる可能性もある。

迫 2030年には新幹線の新駅が港から約4km山側にできます。新幹線を活用したマチづ



くりは今後の小樽の大きな課題。フライ・アンド・クルーズのように新幹線から船に乗り継ぐ利用も可能でしょう。港があるという強みを生かしながら、新駅の存在感を発揮できればいい。

小笠原 「港」という字はサンズイに「巷」^{ちまた}と書きます。かつて港は人々の日常の場であり、暮らしそのものだった。この先も小樽港が市民にとって「巷」となるような整備を進めてほしいと思います。

李 あまり知られていませんが、小樽港は「災害に強い港」でもあります。物流、観光に防災も加え、災害に強いというイメージをもっと前に出していくことも必要かもしれませんね。

本稿は令和元年12月27日北海道新聞 本社版に掲載された記事を同社の了解のもとに転載したものである。



コーディネーター



李 濟民氏 (リジェミン)

小樽商科大学教授
専門は経営戦略・国際経営。小樽商大では産学官連携推進に携わっている。韓国出身。

パネリスト



迫 俊哉氏 (はざまとしや)

小樽市長
1982年に小樽市役所に入庁。総務部長などを経て2018年から市長。現在1期目。



富田 瑞穂氏 (とみたまずほ)

商船三井客船営業グループ課長代理
大学卒業後、商船三井客船に入社。レジャークルーズの企画・販売などに当たっている。



田村 亨氏 (たむらとおる)

北海商科大学教授
専門は交通工学。室蘭工大教授、北大大学院教授などを経て2017年から現職。



小笠原真結美氏 (おがさわらまゆみ)

小樽商工会議所女性会副会長
企画会社オー・プラン代表取締役のかたわら、女性の起業支援活動にも取り組む。



大田 秀樹氏 (おおたひでき)

北海道港運協会小樽支部長
港湾・倉庫業のノーススタートランスポート社長。北海道海運協会会長も務めている。

※肩書きは開催時のもの

●主催

『ザ・シンポジウムみなと』実行委員会

北海道経済連合会、(一社)北海道商工会議所連合会、北海道港湾協会、(一社)寒地港湾技術研究センター、(一財)港湾空港総合技術センター、北海道、国土交通省北海道開発局

●共催

小樽市

●協賛

(一財)北海道開発協会、(一社)北海道開発技術センター、北海道港湾振興団体連合会、北海道港湾空港建設協会、北海道ポートエンジニアリング協会、(一社)日本マリン事業協会、NPO 法人北海道みなとの文化振興機構

●後援

北海道港運協会小樽支部、小樽商工会議所、商船三井客船(株)、朝日新聞北海道支社、毎日新聞北海道支社、読売新聞北海道支社、北海道新聞社、NHK 札幌放送局、HBC 北海道放送、STV 札幌テレビ放送、HTB 北海道テレビ、TVh テレビ北海道、UHB 北海道文化放送